

日本における讃美歌集の変遷

～超教派的なものを中心に～

撰 正弘

日本でプロテスタント宣教が始まったから（プロテスタント宣教師が来日してから）、今年で150年になるそうです。16世紀のザビエルは何だったのかと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、彼はイエズス会（カトリック教会に属する男子修道会）の宣教師です。また、今年にはチャールズ・ダーウインの生誕200周年にもあたり、キリスト教という宗教にとつて、ちよつとした節目の年のような気がします。

今回はアニヴァーサリー・イヤーに便乗して、日本における讃美歌集の変遷について見ていきたいと思ひます。ただ、一口にプロテスタントといつても多様な教派があり、それぞれが独自の讃美歌集を多数編集しています。したがつて、それらを網羅することは出来ません。よつて、今回は代表的なものを紹介することにします。

讃美歌集の黎明期



1859年、横浜や長崎の開港とともに宣教師が来日し、伝道活動を開始しました。1870年代

には、各教派で讃美歌集が生まれましたが、共通の讃美歌集というものはありませんでした。その後、19世紀末に、ジョージ・オルチンという宣教師が宣教師協議会において、「日本における讃美歌」という講演を行いました。オルチン師は、以下の三つの理由から、共通讃美歌集の必要性を述べています。

一つ目に、経済性として、日本の教会は教派主義の贅沢を楽んでいる場合ではなく、持つていける力を活かすために節約が必要だとしています。次に、有効性として、複数の委員会が協力すれば、完成度の高い讃美歌集が生まれるはずだと述べています。三つ目に親交として、共通讃美歌で声を合わせれば、クリスチャン同士で団結しやすくなると主張しています。

オルチン師の提唱を受け、五つの教派による讃美歌委員会が組織され、1903年に五教派共通讃美歌集としての『讃美歌』が出版されました。この讃美歌集によつて、讃美歌の一般的なイメージが確立されました。

改訂と課題



その後、『讃美歌第二編』（1909年）、1931年版『讃美歌』と続き、1954年にはさらに改訂版の『讃美歌』が編集されました。この54年版讃美歌集は、敗戦後の資料が乏しい中での改訂であり、様々な問題を抱えていました。

中でも重要なのは、言葉の問題です。ほとんどが文語で書かれていた日本語讃美歌を、現代仮名遣いに改めるように要求されました。しかし、文語調の歌詞をいきなり口語に作り替えることは出来ません。かといつて、文語の歌詞を放置すれば、多くの会衆が読むことが出来るといふ方針から外れてしまいます。そのジレンマの中で、歌詞の変更は行われました。結果として、文語の歌詞の一部を口語に変えるといふような、どちらかといふと中途半端な変更になつてしまつたことは否めません。また、54年版刊行からある程度の期間が経過すると、別の大きな問題が発生しました。自然や社会、教会や礼拝などといったものに対する捉え方が変化し、54年版の讃

美歌と現実との間にギャップが生じてしまったという事です。

日本のプロテスタント教会は、戦時下の宗教団体法によって、プロテスタント諸派が日本基督教団という合同教会に組み込まれるという経験をしました。教団には讃美歌委員会がありますが、そこに加えられた全ての教会が31年版『讃美歌』を使用していた訳ではありませんでした。終戦後、教団を脱退して元の教派に戻る教会も続々と現れました。54年版の讃美歌が発行されたのはその頃でした。

54年版刊行前後から、教会間の宣教協力や、礼拝・聖典の一致を求めるエキュメニカル（超教派的）な対話が盛んになりました。しかし、超教派的という点においても、前述のように54年版は弱点を抱えていると思われまます。このようにして、伝道・宣教や歴史観、自然観などの見直しが進む中、変化に対応できる讃美歌が日本だけでなく世界的にも求められるようになってきました。そのため諸外国では讃美歌の量産期を迎えたのですが、日本で新たに超教派的な讃美歌集が生まれるのはもう

少し先の話になります。

礼拝と讃美歌

さて、讃美歌というのは基本的には礼拝の中で歌うものですから、ここで少しだけ礼拝についても触れておきます。プロテスタントには、より積極的に会衆が礼拝に参加すべきであるという方針があります。音楽においても聖歌隊が歌うのを聴いているだけではなく、皆で共に歌うべきだ、ということになったのです。

典型的なプロテスタントの礼拝では、まずオルガンの序奏、または聖歌隊の序唱があり、牧師の言葉、聖書朗読、祈禱、お知らせ、献金、説教、最後に祝祷と後奏があり、その間に会衆による讃美歌が2、3曲歌われます。また、数は少ないかもしれませんが、教会によっては、エレキギターやドラム等が置かれていることもありまます。もちろん、楽器が変わっても神さまを賛美するという目的は変わりません。もし機会があれば、実際に礼拝を見学してみるのも面白いかもしれません。

近年の動向

話を元に戻しますが、日本で54年版に続く超教派的な讃美歌集が刊行されるまでに、40年以上の年月が経過していました。そのため新しい讃美歌の編集委員会は、以下の二つのことを行いました。一つは、試用版の刊行です。これは、各教会から新しい讃美歌集についての意見を聞くためです。結果として、多くの意見が寄せられました。が、課題も予想されました。したがって、改訂版出版後も前版の並行出版を決定しました。

1997年に刊行されたこの『讃美歌21』という新しい讃美歌集は、様々な反応を引き起こしました。肯定的評価のうち最大ものは、歌詞の内容を理解できるというものでした。しかし、歌詞については、「解り易ければ良いのか」といった批判もありました。

『21』にはアジアやアフリカの讃美歌も収録されていますが、それに対する批判や反発の声も聞かれました。また、1903年版の『讃美歌』は五教派から編集委員が出されたものであるのに対して、

五四年版や『讃美歌21』は日本基督教団という一教派の編集委員会が作成したものであるという点も異なります。

新しい讃美歌集が良いか悪いかという評価は別にして、その時代に合ったものを生み出す努力は必要だろうと思います。また、『21』が出版された時期には他にも多くの讃美歌集や礼拝関係図書が出版されています。

異文化の音楽を学ぶ時、宗教の問題を避けて通れない状況に遭遇することもあると思います。敬遠しないで少しでも興味を持つてみると、新たな発見があるかもしれません。

参考文献

- ◆今橋明『讃美歌21』刊行から一〇年をふりかえって『礼拝と音楽』133頁、2007（請求記号：0660/134）
- ◆津澤正剛『キリスト教と音楽』Eーロッパ音楽の源流をたずねて』音楽之友社、2007（請求記号：J110-296）
- ◆北村宗次「なぜ、いま賛美歌改訂なのか」『讃美歌21』発刊にあたり『礼拝と音楽』83頁、1997（請求記号：P600/93）
- ◆手代木俊二『讃美歌 聖歌と日本の近代音楽之友社、1999（請求記号：084-156）※付録として詳細な年表あり。
- ◆横坂康彦編『講座 日本キリスト教共同 2006（請求記号：J108-234）

●えらぶ、まさひろ 本文を埋めるより、このスペースを埋めるほうが、ある意味で難しいです。